



## スペイン味うおっちゃんぐ

第1回 アーモンド



江戸時代に南蛮船で来日したポルトガル人が日本にもたらしたというアーモンド。ヨーロッパにおける起源は紀元前4000年と古く、紀元前300頃に中近東よりギリシア経由でイベリア半島に持ち込まれ、その後、ローマ人たちの優れた農耕技術により、その栽培が地中海沿岸地域を中心に定着していったのだという。

約800年間に渡りスペインに残した巨大な足跡であるアラブの食文化を代表する食材であるアーモンドは本来、その他の乾燥ナッツやドライフルーツと同様、新鮮な果実の少なくなる冬期の大切な保存食だった。干し柿のようなものである。

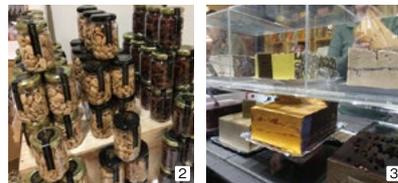
中世の頃までは王侯貴族や上流階級の人々の高級嗜好品とされ、宴の席などの国王のテーブルにはアーモンドが添えられたという。カトリック教国スペインにおいて、時として王室以上の政治力、経済力を持ち合わせていた教会や修道院だからこそ、おそらくアーモンドをお菓子に使うことが出来たのだろう。

アーモンドの実は、クリスマス期のトゥロンやマサパンだけでなく、その他の製菓材料、煮込み料理やソースの材料として、通年、幅広く活用される一方で、アーモンドオイルを原料にし

たローションやシャンプー、クリームは、皮膚の炎症を抑える効果が高い上に副作用が少なく、美容・健康面で非常に重宝されている。また、アーモンドミルクは乳糖不耐症の人でも飲めるコレステロールを含まない良質な栄養飲料として自然派食品店の棚を陣取っている。小児科医が幼児の治療にアーモンドオイルやミルクを勧めることも少なくない。更には、消化を助ける効果や、食前に数粒、食べることによって、悪酔いや二日酔いを防ぐ効果もあり、“一粒で二度おいしい”などと言っている場合ではない。

こうした効果は今でこそ研究結果として明確にされているものの、遙か昔の人たちは生活の中でその大切さを身に付けていったのだ。レストランで、軽く揚げたアーモンドが程よい塩味で出てくることがあるが、食前のアーモンドは、美味しいだけでなく健康管理の面もフォローしてくれる絶好のおつまみだと言える。

ヘアライ語で“目覚め”を意味するというアーモンドの木は、2月初頭頃には他の木々よりもいち早く優しいピンク色の花を咲かせる。スペインに春を到来を知らせてくれるのだが、二日酔いの朝の目覚めをスッキリさせくれるのもまた、アーモンドなのである。



1 アーモンドとサラソネス(魚の塩蔵品)は伝統的な組み合わせ 2 世界に誇る最高品質のマルコナ品種は「アーモンドの女王」 3 アーモンドを使ったクリスマス菓子として有名なトゥロン



※マルコナアーモンドは日本から購入可能です。ご希望の方は下記のアドレスまでご一報ください。

片岡治子 / Haruko Kataoka

大阪府出身。1991年より渡西。スペイン全土を食べ歩きの後、スペイン家庭料理研究家として料理教室を主催する他、WEBや雑誌等のレシピコラムの執筆を手がける。スペイン国内で営業業務、某ワイナリーの販売業務を経て、バレンシアを拠点に日本市場に向けて食材・飲料の輸出業務を中心に行う「オルカ・スペイン ORTIZ&KATAOKA, S.L.」経営。一夫二妻一匹と共にスペイン田舎生活現在進行中。オルカ・スペイン [www.orkaspain.com](http://www.orkaspain.com) / [orka@orkaspain.com](http://orka@orkaspain.com)

## おススメ LIBROS



### 書評

川成 洋



■彩流社  
■2017年3月刊  
■定価 2,500円+税



川成 洋  
Yo Kawanari  
1942年札幌で生まれる。北海道大学文学部卒業。東京都立大学大学院修士課程修了。社会学博士(一橋大学)。法政大学名誉教授。スペイン現代史学会会長、武道家(合気道6段、杖道3段、居合道4段)。書評家。主要著書:『青春のスペイン戦争』(中公新書)、『スペイン-未完の現代史』(彩流社)、『スペイン-歴史の旅』(人間社)、『ジャック白井と国際旅団-スペイン内戦を戦った日本人』(中公文庫)他。

## わたしのイスパニア語の旅

—スペインから中南米諸国へ

市川慎一 著

本書を紐解いて、なんとも不思議と思うのは、本書の著者は、我が国ではフランス啓蒙思想を専門とする著名な仏文学者である点だ。

著者のスペイン体験は、1967年、バルセロナ大学での3ヶ月間の夏季スペイン語学研修だった。たまたまこの前年から、フランス政府給費留学生として南仏のモンペリエ大学で研修を受けていたが、スペイン国境に近いこと、それに当時のフランコ独裁政権を忌避してその大学で雑用などの仕事をしている幾人かの元スペイン共和派のスペイン人が同胞と美しいスペイン語で話していたこと、そして著者が生まれた1936年に勃発したスペイン内戦に興味を持っていたこと、などが著者をスペインへ向かわせたのだ。

それにしても、1967年といえば、1892年生まれのフランコは75歳くらい、フランコ体制の屋台骨が軋み始めていた頃であろう。ちなみに、私も、その2年後の1969年に初めてスペインを経験した。主要都市の散策くらいの旅だったが、ソ連などの共産圏には通過しかできなかった当時、全体主義国

家を体験できるのは、唯一スペインだけだった。言ってみれば、20代の野次馬根性からだったのだろう。フランコ独裁体制とはどんなものか、窒息しそうな「公権力の監視の眼」の社会というべきか、それなりに分かったような気がした。

勿論、著者の興味は、なんといっても、スペイン内戦である。内戦末期から共和国の敗北にかけて、共和派は、フランコ陣営の報復・弾圧を恐れて徒歩でピレネーを越えるが、フランスの収容所は露天だった。さながら野生動物の扱いだった。これが民主主義国フランス政府の対応だった。著者の怒りは頂点に達する。

次に著者は、支倉常長に率いられた慶長遣欧使節団の末裔とも言われている、セビーリャの南西約12キロのコリア・デル・リオにいる、現在600人余りの「ハボン(日本人)」という姓を持つ人々を見逃さない。

さらに、支倉が太平洋を渡り最初に到着した国メキシコへと旅の行程が伸びる。メキシコのコリマ大学での「集中講義」10回

を担当する。テーマは、ザビエルと日本人の西洋との邂逅、大城立裕と沖縄の歴史的・社会的変遷、司馬遼太郎が見た日露戦争、大江健三郎と戦後世代、など興味深い内容であった。また画家のルイス・ニシザワの自宅訪問、ディエゴ・リベラと藤田嗣治の関係を調査する。

さらにキューバではヘミングウェイの足跡を追い、アルゼンチンのラ・フラタ大学の国際学会で「オキナワとフクシマ」と報告する。チリでは、スペイン内戦前に、ガルシア・ロルカやラファエル・アルベルティなどの『27年の世代』に詩人たちを親交を結び、内戦期にチリ大使としてマドリッドに駐在する。内戦終了後チリに戻り、幾多の詩集を発表し、71年にノーベル文学賞受賞した詩人のパブロ・ネルーダ(1904~73)の家(博物館)を訪ねる。

本書の内容は、人文科学系の学際的研究に他の追従を許さないものの、「地球の徘徊者」という異名を頂戴する実にユニークな旅行・滞在記である。